軍事組織の必要条件

－　作戦術とドクトリン　－

北川　敬三

はじめに

本稿の目的は、主に 1980 年代から 1990 年代にかけての英米を中心とする北大西洋条約機構（NATO）諸国において発展した軍事的概念である「作戦術（Operational Art、オペレーショナル・アート）」と軍事ドクトリン（military doctrine,　以下、「ドクトリン」）及び関係する概念の関係を整理し、歴史的経緯、適用と今後の展望を明らかにするものである。

作戦術とは、戦争・戦略の三つのレベル、すなわち「戦略レベル（Strategic Level of War）」と「戦術レベル(Tactical Level of War)」を繋ぐ「作戦レベル(Operational Level of War)」に適応される軍事行動を律する概念である（表参照）。1980 年代以降、「作戦術」は英米を中心とした軍事組織における革新運動の一環として盛んになり、一般の研究者における研究も盛んとなっている[2]。

作戦術は、ようやくここ数年で日本において認知されてきたように思われる[3]。『海幹校戦略研究』を刊行し、広く知的発信と交流を実施している海上自衛隊幹部学校（以下、「海幹校」）には、優れたリーダー育成のため国際レベルの教育研究が求められる。海幹校は、平成 30 年度の第 65 期指

---

[2] 「作戦術」と「作戦次元」の起源と系譜については、齋藤大介「戦争を見る第三の視点－『作戦術』と『戦争の作戦次元』」『戦略研究』第 12 号、2013 年 1 月、79-100 頁を参照。作戦術の発展に関する学術論文をまとめたものとして、例えば John Adreas Olson and Martin Van Creveld, eds., *The Evolution of Operational Art; From Napoleon to the Present,* Oxford University Press, 2011。同書の書評は、阿部亮子、*The Evolution of Operational Art; From Napoleon to the Present*,『防衛学研究』第 46 号、2012 年 3 月、124-132 頁がある。

[3] 日本語で読める文献としては次を参照。田村尚也『用兵思想史入門』作品社、2016 年、は用兵思想史の流れとして、作戦術とその背景が理解しやすい。北川敬三『軍事組織の知的イノベーション―ドクトリンと作戦術の創造力』勁草書房、2020 年、は組織におけるイノベーションの一環として軍事における作戦術とドクトリンを正面から扱っている。阿部亮子『いかにアメリカ海兵隊は、最強となったのか―「軍の頭脳」の誕生とその改革者たち』作品社、2020 年、は戦争のレベルを踏まえた上で米国海兵隊のベトナム戦争以降のドクトリンの変容を扱っている。

揮幕僚課程より戦略教育のカリキュラムに作戦術を導入している[4]。導入時、筆者は同校戦略研究室長として作業の先頭にあった。問題意識として、それまで多国間共同における現場やロンドンでの防衛駐在官時代の他国軍人との議論の場や英軍の教育研究を通じ、共通基盤として作戦術の必要性を痛感したことが原点にあった。

表　戦略と戦争のレベル

戦略のレベル	戦争のレベル	管轄	担当
政略（Politics）	War（戦争）	政治	政府
戦略（Strategy） Grand/Military/Theater			各省 幕・参謀本部
作戦（Operational）	Campaign（戦役） Major Operations（会戦） Operation（作戦）	用兵	統合司令部 艦隊司令部
戦術（Tactical）	Battle（戦闘）		部隊
術科・技術（Technical）	Combat/Engagement/Action（交戦）		個人、 個艦

（出所）筆者作成。

世界の軍事組織の標準というべき英米両国も含む NATO は、ドクトリンを「目標達成のために軍事組織の行動を導く原理原則であり、組織によって認可されるものの、実運用にあたっては指揮官の判断を要するもの」としている[5]。換言すれば、ドクトリンは組織として認可された「軍事組織の戦い方」ともいえる。そのため、ドクトリンは組織を統合し、繋げる重要な役目を有する。したがって、作戦術とドクトリンは両輪ともいえる意義を持つ。

今日、作戦術に基づくドクトリンは、日本が価値観を共有する英米を中心とする NATO 諸国や、インド太平洋において緊密な協力関係にある米豪における共通ツールとなっている。作戦術は、まさに我が国が海外におい

[4] 寺田博之「海上自衛隊幹部学校の教育改革」『海幹校戦略研究』第 8 巻第 2 号、16 頁。
[5] North Atlantic Treaty Organization, *AJP-01(D): Allied Joint Doctrine,* 2017, p. 1-1.

て主義主張を等しくする（like-minded）国々と協力する際の共通言語であるといっても過言ではない。作戦術は、戦略レベルと戦術レベルを橋渡しすることから、後述するとおり、非軍事分野における領域にもその方法論は適用できる。

本稿は、理論、コンセプトやドクトリンといった軍事の諸概念との関係から作戦術を解説する、学術的かつ入門的な位置づけとなる論文を意識している。対象となる戦争・戦略のレベルは、「作戦レベル」である。本稿は次のように構成される。第 1 節では、基本的な諸概念（アート、サイエンス、理論、コンセプト、ドクトリン）を整理する。軍事を支える知的要素としてアート、サイエンスがあり、それらの具体的な姿が理論でありドクトリンであることを明らかにする。第 2 節では、歴史的観点から、作戦術とドクトリンを論じる。第 3 節では、作戦術とドクトリンの展望を、これらの適用する観点から論じる。

1　作戦術とドクトリン：諸概念

イングリッシュ（John English）は「戦略が戦争の術（strategy is the art of war）であるならば、戦術は戦闘の術（tactics is the art of battle）であり、作戦術は戦役の術（operational art is the art of campaigning）」と語っている[6]。では、なぜ「アート」なのであろうか。これを理解するためには、「軍事における知的態度」を形作る上で中心となる概念、すなわち「術（アート）」と「科学（サイエンス）」、「理論」と「ドクトリン」、「ドクトリン」と「コンセプト」さらには「ビジョン」の関係を明らかにしなければならないだろう。軍事における知的態度とは、問題解決の方法論の構築を重視し、独創性と柔軟性を担保しつつ「戦争の術と科学」を探究する姿勢である。特に、軍事組織の高等教育・研究・運用に求められる。

（1）術（アート）と科学（サイエンス）

ビジネスの世界においても、近年「アート」と「サイエンス」の関係が組織の経営品質を高めると評価されている[7]。ビジネス戦略の源流は、軍事

---

[6] John English, “The Operational Art: Developments in the Theories of War,” - B.J.C. McKercher and Michael A. Hennessy eds., *The Operational Art: Developments in the Theories of War*, Praeger, 1996, pp. 7-27.

[7] 山口周『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？―経営における「アート」と「サイエンス」』光文社、2017 年、212-213 頁。

戦略である。軍事組織には、歴史的に「戦争の術（Art of War）」と「戦争の科学（Science of War）」という表現がある。戦争は「術」であるのか、「科学」であるのかという議論は既に 19 世紀後半の米国で盛んであった。

例えば、戦争省（War Department）においては、戦争は「科学」と「術」の両面性があるとされていた。戦争を「科学」とする理由として、戦争を遂行する軍人が、作戦に必要な原則を理解した上で実施しなければならないからだと指摘されていた。一方、戦争を「術」とする理由は、それらの原則を実際の戦争に適用することは、「術」の領域であるからだとされていた[8]。このような理解があったからこそ、19 世紀後半に、「戦争の術と科学」を教育研究する場として 1881 年に米国陸軍指揮幕僚大学校（U.S. Army Command and General Staff College）、1884 年に米国海軍大学校（U.S. Naval War College）が創設され大学院レベルの教育が開始された。

戦争を理解することは、極めて知的な作業である。戦争とは複雑な社会現象であり、単に知識や理論だけを全てに当てはめることは不可能である。芸術も、芸術家たちは基本を学んだ上で、あとは定量的に計測不能な人間の知性と独創性で、新たな領域を切り拓いていく。戦争を理解し、遂行するのも「科学（サイエンス）」という理論的な「知識」と「術（アート）」という、いわば総合的な「能力」と知的態度が必要ということができよう。

（2）理論とドクトリン

軍事において、「アート（術）」と「サイエンス（科学）」は、理論と往還しながら更新され続けるドクトリンによって結びつけられる。米国の軍事理論家のレオナルド（Robert Leonhard）は、「軍事における理論は将来を予想するために過去を説明するもの」、と定義している[9]。理論は過去をインプットし、将来をアウトプットするものとも理解できる。さらに、レオナルドは、軍事における理論の重要な資質として、「予想すること」および「軍事理論は社会科学の領域に入ること」、の二点を挙げている[10]。軍事理論が社会科学の領域に入るとすれば、数学、物理学や機械工学において求められるような正確性や緻密性は求められず、純粋な科学理論であるべき必要性はない。さらに、軍事理論は、軍事思想、軍事史、ドクトリン、軍

---

[8] John I. Alger, *The Quest for Victory*, Westport: Greenwood Press, 1982, p. 83.
[9] Robert R. Leonhard, *Fighting by Minutes, Time and the Art of War*, Praeger, 1994, p. xix.
[10] Ibid., p. xxi.

事研究と異なり、戦争の一般化と軍事力の使用に関する学際的であり主に作戦レベルと戦術レベルを論ずるもの、とされる[11]。

他方、ドクトリンはどう定義できるのだろうか。ドクトリンは、冒頭で述べた通り「目標達成のために軍事組織の行動を導く原理原則であり、組織によって認可されるものの、実運用にあたっては指揮官の判断を要するもの」とされる[12]。また、ドクトリンは軍当局者が、それぞれの条件に応じて戦いの原則を編纂し、実行の指針として適用するよう規定した「教義」とも称することができる[13]。さらには、「ドクトリンは何を考えるかではなく、どう考えるかについて」であり、「ドクトリンは、主導的で独創的な思考法を進める」とも定義されている[14]。ドクトリンは、軍事組織によって開発・認可された思想体系とも言える。また、特に戦術レベルのドクトリンは、標準手順として部隊指揮官が達成目標を明確にすることで教育訓練の根拠となり、作戦に一貫性と継続性をもたせることができる[15]。

軍事組織には理論とドクトリンの両方が必要である[16]。新たな情勢に対応し、次代のドクトリンを下支えするには理論が必要となるのである。軍事組織の行動には、その根拠が必要であり、その一つがドクトリンである。組織が生存するためには、ドグマ的な硬直性を避けることは必須であり、そのためにドクトリンは更新され続けなければならない宿命にある。なお、英軍はドクトリンを基本的に 3 年間周期での見直しを義務付けている[17]。これにより、ドクトリンがドグマ化することを防ぐ仕掛けを制度的に設けている。

(3) ドクトリン、コンセプト、ビジョン

「ドクトリン」、「コンセプト」及び「ビジョン」は、軍事における知的態度を探究する上で、必ず出会う概念である。これらの関係を理解してお

---

[11] Jan Angstrom and J.J. Widen, *Contemporary Military Theory*, Routledge, 2015, pp. 4-11.
[12] North Atlantic Treaty Organization, *AJP-01(D),* p. 1-1.
[13] 戦略研究学会編、片岡徹也・福川秀樹編著『戦略・戦術用語辞典』芙蓉書房出版、2003 年、37 頁。
[14] Department of the Army (USA), *FM 3-0,* 2008, p. D-1.
[15] Wayne P. Hughes jr., and Robert P. Girrier, *Fleet Tactics and Naval Operations: Third Edition*, Naval Institute Press, 2018, pp. 22-23.
[16] Leonhard, *Fighting by Minutes, Time and the Art of War*, p. xxi.
[17] The Development, Concepts and Doctrine Centre, *Developing Joint Doctrine Handbook,* Ministry of Defence, 2013, pp. 2-20-2-21.

くことは、軍事組織が国際的な協力を行う上では不可欠であり、軍事・安全保障研究においても峻別する必要があろう。

米国空軍の研究組織であるカーティス・ルメイ・センター（Curtis E. Lemay Center）は、次の様に整理している[18]。ドクトリンは、短期的な作戦的課題に焦点をあて、軍事組織の現有能力の発揮を説明するもの。コンセプトは、5 年から 10 年の時間的視点で部隊運用、作戦環境、指揮統制、ロジスティクス、組織構成を踏まえたシナリオを想定するもの。そしてビジョンは、15 年先以降の技術開発に焦点をあてるもの。米国空軍は、それら相関する三つの概念を用いることで先端技術が長期的に組織に与える影響を理解できるとする。この視点は、先端科学技術開発に要する時間と、新たな部隊運用を考える時間軸を考慮すると妥当である。

英国国防省のシンクタンクである開発･コンセプト･ドクトリンセンター（Development, Concept and Doctrine Centre: DCDC）は、名前のとおり、コンセプトとドクトリンの研究開発、長期世界情勢見積もりを行い、国防戦略や防衛力整備に寄与することを目的としている。同センターは、次のように整理している[19]。ドクトリンは、各級指揮官に対し作戦遂行におけるベストプラクティスと教訓に基づくガイドラインとする。コンセプトは、向こう 10 年から 20 年、英軍がどのように作戦遂行するか示すもの。そして、ビジョンに当たるものが「フューチャー」であり、向こう 20 年から 30 年のスパンで軍事組織を越えた戦略的トレンドを予想している。付言すると、同センターは英国のみならず、NATO ドクトリンの一部も担当しており、スウェーデン軍のドクトリン開発も行う国際性の強い組織となっている。

以上から理解できることは、ドクトリン、コンセプト及びビジョンは、目的は同じであるものの、時間軸が異なると結論付けることができる。

2　作戦術とドクトリン：歴史的背景

本節は、作戦術とドクトリンの関係を歴史的視点で解説する。作戦術は、まさに理論とドクトリンの往還から発展した概念である。さらに、作戦術

---

[18] Curtis E. Lemay Center, “Doctrine, Operating Concepts, and Vision,” *Volume 1 Basic Doctrine*, February 2015, pp. 1-2, www.doctrine.af.mil/Portals/61/documents/Volume_1/V1-D08-Doctrine-Concepts-Vision.pdf.

[19] The Development, Concepts and Doctrine Centre, *The Development, Concepts and Doctrine Centre,* Ministry of Defence, 2016, pp. 3-11.

は、研究と実践を要することから、術（アート）と科学（サイエンス）とされる[20]。

（1）作戦術のおこり

作戦術の起源は、諸説あるが、その起源はナポレオン時代の 19 世紀に遡る。ジョミニ（Antonine Jomini）、クラウゼヴィッツ（Carl von Clausewitz）、モルトケ（Helmuth von Moltke）、リデルハート（Basil Liddell-Hart）といった、19 世紀以降の用兵思想家達は既に「大戦術（grand tactics）」や「作戦的（operative）」として、国家レベルの「戦略」と、部隊指揮官の実施する「戦術」の間に横たわる広範な領域についての暗黙的な認識は持っていた[21]。

作戦術を明示化したのは、ソビエト連邦が最初であるというのが通説である。1922 年にソ連陸軍士官学校教官のスヴェーチン（Aleksandr A. Svechin）により、「作戦術（operativnoe iskusstvo）」の概念が導出されていた。この背景として、帝政ロシア時代のクリミア戦争、日露戦争、第一次世界大戦において、近代戦を遂行するのに必要な軍事ドクトリンや複数大規模部隊の指揮統制に問題があったとする教訓があった[22]。これにより、1920 年代には、既にソ連においては、「軍の術（voennoe isksstvo、英語では military art）」の階層化が図られていた。この経験は第二次世界大戦や冷戦中の欧州における大規模作戦計画に活かされ、ソ連軍の機動力を重視し敵縦深に至る「縦深作戦（Deep Operation）」の概念に繋がった。さらに注目すべきは、政治的イデオロギーが軍の編成や戦術までも規定したソ連から、政治的に翻訳可能な軍事的概念が出てきたことである。しかし、作戦術という言葉が明文化され、国際的に広く使われるようになるのには 1980 年代以降まで待たなければならなかった。

（2）英米を中心とする英語圏における作戦術の勃興

英米を中心とする英語圏において、作戦術を論じる領域である「作戦レベル」を理論的に唱え、研究の端緒を築いたのは国際政治学者のルトワック（Edward N. Luttwak）である。1981 年、ルトワックは学術誌

---

[20] Milan Vego, *Joint Operational Warfare: Theory and Practice,* U.S. Naval War College, 2007, p. I-3.
[21] English, “The Operational Art: Developments in the Theories of War,” pp. 7-10.
[22] Jacob W. Kipp, “The Tsarist and Soviet Operational Art, 1853-1991,” *The Evolution of Operational Art*, pp. 64-69.

International Security に「戦争の作戦レベル（The Operational Level of War）」を発表した。米国陸軍が教範の改訂を行うことを知ったルトワックが書いた論文は同陸軍が注目することとなり、後述する 1982 年版の野外教範『作戦（*FM100-5: Operation*）』に反映されることになる[23]。

この論文中、ルトワックは「戦争の作戦レベル」はアングロサクソンの軍事用語には欠如している領域であり、実際の戦争の状況に適合した用兵思想の必要性を提起した[24]。ルトワックの具体的な主張は第二次世界大戦における国家経済総動員と早期部隊建設による消耗戦（attrition）という米国流の方法で長期的な戦争を戦うことは、朝鮮戦争及びベトナム戦争における第三世界への介入を経験した米国では、もはや国内政治的に不可能であるという認識があった。このため、冷戦における欧州正面において、ワルシャワ条約機構軍に対して総合火力で劣勢な NATO 軍が長期の消耗戦を避けて勝利するには回避・欺瞞・勢い（モメンタム）を駆使した「機動戦(maneuver warfare)」で不利を補う必要性があるというものであった[25]。

それまでの機動戦は、敵に対し自軍が優位な位置に占位するというものであった。しかし、作戦術により機動戦は新たな含意として劣勢な軍事組織が時間と場所において決定的な優勢を確保するための方法論となった。新たな機動戦による敵に対する優位性は心理的、技術的、時間的かつ空間的なものにまで及んだ[26]。ルトワックが唱えた「作戦レベル」の概念は、軍事の概念を超え戦略理論として定着していく[27]。

（3）作戦術の発展

このように、英語圏における作戦術は学界が先行する形で発展していくことになる。米軍において本格的に「作戦レベル」の考え方が採用されたのが、1982 年版の陸軍の野外教範『*FM100-5: Operation*（作戦）』である。さらに、同教範の 1986 年の改定で作戦術が取り込まれた。これにより、米国を中心とする西側諸国の軍事組織は、作戦術の言葉を持つことになった。

---

[23] ルトワック博士へのインタビュー（東京、2016 年 10 月 30 日）。

[24] Edward N. Luttwak, “The Operational Level of War,” *International Security*, Vol. 5, No. 3, Winter 1980-1981, pp. 61-79.

[25] Ibid., pp. 77-79.　Maneuver Warfare の日本語訳には、機動の持つ空間的な意味合いだけでなく、時間的・心理的要素を包括する表現として「機略戦」という用語（北村淳・北村愛子編著『アメリカ海兵隊のドクトリン』芙蓉書房出版、2009 年、176-205 頁）もある。

[26] U.S. Marine Corps, *MCDP 1: Warfighting,* 1997, p. 72.

[27] エドワード・ルトワック『エドワード・ルトワックの戦略論』武田康裕・塚本勝也訳、毎日新聞社、2014 年、174-212 頁。

これは軍事理論としてのブレークスルーであった。軍の指揮官には、サイエンスに裏打ちされたアートを用いた独創性が求められることになった。ここに各界で作戦術並びにドクトリンの研究と実用化が進んでいくことになる[28]。この中核となったのが、1973 年 7 月 1 日に創設された訓練・ドクトリンコマンド（TRADOC）であり、初代司令官デピュイ（William E. DePuy）である。その創設以来、訓練・ドクトリンコマンドは、ドクトリンを概念化・制度化し、教育訓練機関を通じて米国陸軍に徹底するための組織として機能し続けている[29]。

以上に加え、作戦術の構築の過程において、核兵器の使用という政治的に困難な課題の影響も指摘しなければならない。1980 年代から 1990 年代の NATO 加盟国で、作戦術が受け入れられたのも、将来の戦闘様相において核兵器の使用はできるだけ遅らせるべきだという考えが根底にあった。

したがって、政治決断で核兵器の使用に踏み切らなければならない状況になる前までに、迅速に陸上戦闘で勝利することが必要とされたため、作戦術による通常戦闘の必要性が増した[30]。中でも英国は、1989 年に英国軍事ドクトリン（British Military Doctrine）を制定したが、これは 1980 年代の作戦術研究とドイツ駐留軍による機動戦の実験成果にほかならなかった[31]。

その後、作戦術は大部隊の運用、機動力を要する縦深性、技術の進歩の必要性に関し、ドクトリンと組織改革の両方に作用していった。この成果が陸上兵力のみならず、陸空軍の航空兵力と統合した「エアランド・バトル（Air Land Battle）」の開発に繋がっていくことになる。エアランド・バトルの要諦は、同時攻勢作戦を戦場の幅と縦深において実施し、敵を敗北させるものである。

こうして 1982 年に制定されたエアランド・バトルの構想と次節で述べる TRADOC の研究開発による新装備は、全て 1991 年での第一次湾岸戦争「砂漠の嵐作戦」（Operation Desert Storm）に結実することになる[32]。1980 年代の政治、政策、軍事における諸準備は、「砂漠の嵐作戦」を米軍事史上、政軍関係を含め、最も成功した戦役（campaign）とされているが、第一次湾岸戦争は、米国と有志連合軍の作戦術に基づく機動戦の勝利であっ

---

[28] Shimon Naveh, *In Pursuit of Military Excellence: The Evolution of Operational Theory*, Frank Cass, 1997, pp. 11-12.
[29] 北川『軍事組織の知的イノベーション』148-157 頁。
[30] Angstrom and Widen, *Contemporary Military Theory*, p. 58.
[31] 北川『軍事組織の知的イノベーション』167-177 頁。
[32] 葛原和三『機甲戦の理論と歴史』芙蓉書房出版、2009 年、141-144 頁。

た。同じく、第一次湾岸戦争の一翼を担った米国海兵隊も、まさに同時代の 1989 年から 1990 年に『FMFM1：ウォーファイティング』等の基盤ドクトリンを制定し機動戦思想を採用していた。これらの機動戦ドクトリンの下、海兵隊指揮官は独立した思考や意思決定が求められるように変化した[33]。次節では、より実践的かつ、現在における作戦術とドクトリンの適用を論じていく。

3　作戦術とドクトリン：その適用

第 1 節と第 2 節で、作戦術とドクトリンの概念を整理した上で、歴史的発展経緯を論じてきた。ホイバック（Harold Hoiback）は、ドクトリンは三つの道具、すなわち指揮の道具、改革の道具及び教育の道具として作用するとした[34]。本節では、ホイバックの「道具」を準用し、現在に適用できる統合作戦・国際共同、統合教育、装備体系の三つの道具として作戦術とドクトリンの関係を論じる。

（1）統合作戦・国際共同のツール

作戦術は、戦略レベルと戦術レベルを橋渡しする概念であり、適用範囲が広い。したがって、それを具現化するドクトリンも各レベルで対応する必要が生じる。作戦術とドクトリンは、いわば対の存在であることを、本稿ではこれまで明らかにしてきた。現代の国際安全保障は、一国のみで自国の安全を担保することは非現実的である。そのため、NATO 等では、相互運用性（interoperability）を重視し、特にドクトリンと手順を標準化している。

作戦術は、NATO の定義では「戦略的かつ作戦的目標を、軍事組織によるデザイン、組織、インテグレーションに基づき、戦略、戦役、主要作戦、戦闘を通じ、戦略的及び作戦的目標を達成する」とされる[35]。ドクトリン作成の役割分担を英国では、戦略及び作戦レベルのドクトリンをドクトリン・コンセプト開発センター、戦術レベルのドクトリンは各軍の warfare centre が担っている[36]。統合作戦との関係性について米国海軍大学校のベゴ（Milan

---

[33] 阿部『いかにアメリカ海兵隊は、最強となったのか』240 頁。
[34] Harold Hoiback, *Understanding Military Doctrine: A Multidisciplinary Approach*, Routledge, 2013, p. 4.
[35] North Atlantic Treaty Organization, *AJP-01(D),* p. 4-5.
[36] The Development, Concepts and Doctrine Centre, *The Development, Concepts and Doctrine Centre,* p. 11.

Vego）は、作戦術は「兵術（Military Art）を構成する要素であり、戦域における戦略もしくは作戦上の目標（Strategic or Operational objectives）を完遂するための戦役（campaigns）と主要作戦（major operations）を支持する計画、準備、実施の理論と実践である」と述べる[37]。作戦術の概念を定着させる先駆けとなった米国陸軍は、作戦術を「計画、組織、統合、戦闘の実施及び戦役、主要作戦への関与を通じ、戦略目的（Strategic goal）を達成するための軍の使用である。戦争において作戦術は時期、場所、主要部隊の戦闘目的を規定する」と定義している[38]。

英国の統合ドクトリンによると、「作戦術は、戦術的成功と戦略的達成点（Strategic End-State）との間を繋ぐもの（linkage）であり、作戦レベルの司令部による熟練した遂行にかかっている」とし、「決定的な結果を求める観点から、戦略目標を戦術的行動に変換する全ての軍事活動の調和（orchestration）であり、作戦を遂行する部隊の目的、場所、時間を決定するもの」と定義している[39]。どの組織とも、作戦術を戦略目標と戦術行動を繋ぐものとして明確に定義している。

ただし、現実の戦争や軍事行動において、戦略、作戦、戦術、三つのレベルの間に常に明確な区分があるわけではない。しかし、これらのレベルの存在を理解することにより、責任ある指揮官が円滑に作戦の論理的調整、資源配分を適任のレベルの司令部に任務を付与する助けとなることが期待されている[40]。戦争は一回の戦闘で終結するものではない。このため、作戦レベルにおいて個々の戦術行動にまとまりを与え、個々の戦術的努力を戦略的成果として結実させるための道標となるのが「戦役（campaign）」概念の役割とされる。この概念によって一連の戦術行動は連続性ないし文脈を得て、さらに高次の戦略レベルへと連接する[41]。

しかし、作戦術がいくら戦略と戦術を繋ごうとも、戦略の存在なしには成立しない[42]。また戦争とは、つまるところ戦役の集合体であり、戦役は戦

---

[37] Vego, *Joint Operational Warfare: Theory and Practice*, p. I-4.
[38] U.S. Army, *FM100-5 Operations*, June 1993, p. Glossary-6.
[39] The Joint Doctrine and Concept Centre, *JWP 5-00 Joint Operation Planning*, March 2004, p. 2-5.
[40] The Joint Chiefs of Staff, *JP3-0 Joint Operations*, 2017, p. I-12.
[41] 片岡徹也編『軍事の事典』東京堂出版、2009 年、20-22 頁。片岡は、昭和期以降「戦役」が用いられなくなったことが日本の兵学や用兵から長期的・大局的な視野を失わせ、個々の「作戦」はあっても、それらを相関連した一連の「戦役」と捉える視点はなかった、と分析している。
[42] Rupert Smith, “Epilogue,” The *Evolution of Operational Art; From Napoleon to the Present*, p. 236.

闘の集合体である。このように作戦レベルを戦略レベルと戦術レベルの間に配置して戦争を階層化することは、レベルの相互関係が明確になり、軍事活動あるいは国家の安全保障政策の遂行や国家組織間の役割分担に役立つと考えられる。これを担う組織として、英国やオーストラリアを含む作戦術をドクトリンの基本に置く国々には、常設統合司令部（PJHQ: Permanent Joint Headquarters）が設けられている[43]。

以上から明確になるのは、作戦レベルが担う国家戦略の実現は統合作戦のみでしか実現しないという点である。すなわち、単一軍種では、作戦レベルの部隊運用を通じて国家戦略実現に寄与できない、ということである。さらに言えば、NATO 諸国における組織改革に注目する必要がある。歴史的事実として、作戦術に基づくドクトリンの導入が、特に 1990 年代後半に常設統合司令部を含む組織改革が統合の進化に寄与した。このプロセスは自衛隊の統合態勢に、多くの示唆を与えている。

（2）統合教育進化のツール

統合作戦・国際共同に必要な人材養成に資する、統合教育の観点はどうだろう。作戦術は戦略目標と戦術行動を繋ぐための概念であるが、実際にこれを理解し使いこなすためには「術」（アート）と「科学」（サイエンス）との両方に包含されるさまざまな非軍事的要素をも考慮する必要がある[44]。作戦術の導入は、その軍事組織の知的態度、とりわけ、高級指揮官に必要とされる資質や能力、姿勢に変化をもたらした。作戦レベルを通じて国家戦略に寄与するため行動する指揮官とその幕僚に対して、担当エリアにおける戦役や大きな作戦を遂行する場合に、軍事のみならず、その前提となる戦略や政策、すなわち非軍事的な領域（外交、政治、経済、財政、社会、宗教など）についても精通し、考慮の対象とすることが求められるようになった[45]。

これらは、国際社会において、その国の軍事組織がリーダーシップを発揮する上で、必要な条件と思われる。国際舞台でのリーダーシップ配置を

---

[43] 英国の PJHQ と統合の関係は、岡本知力羅「統合組織への英軍の変容―「常設統合司令部」設立の視点から」『防衛学研究』第 63 号、2020 年 9 月、111-134 頁を参照。

[44] Robert R. Leonard, “From Operational Art to Grand Strategy,” Anthony D. McIvor ed., *Rethinking the Principles of War*, Naval Institute Press, 2005, pp. 213-214.

[45] Milan Vego, *Operational Warfare at Sea: Theory and practice*, Routledge, 2009, p. 4.

執ることが国益に繋がることは、コアリッション（有志連合）や多国間訓練の場において、CTF（Commander Task Force）や CTG（Commander Task Group）を執ることに各国軍がしのぎを削っていることからも明確である。海自も、例外ではない。2015 年以降、中東・アフリカにおいて、海賊対処任務を遂行する多国籍部隊である第 151 連合任務部隊（CTF151）指揮官を関係国とともに輪番で遂行し、国際社会にプレゼンスを示している。

この結果、指揮官や幕僚には、軍事・非軍事両面の多様な事項を踏まえて実際の軍事行動を実現するためのデザイン構築能力、ドクトリン構築能力、さらには、作戦及び戦役のプランニング能力（campaign planning）が求められることとなった。加えて、それらを最大限に発揮する指揮哲学である任務指揮（Mission Command）が要求されることとなった。任務指揮とは、部下に行動と思考の自由を与える手法であり「作戦術」の重要な要素とされる。任務指揮には、①適時適切な意思決定、②上級指揮官の意図の理解、③その意図を実現するための部下の責任の明確化、④正しい成果に導くための継続的な計画が含まれる[46]。

このように、作戦術は、軍事組織の知的態度の必要な要素として、①戦役や大きな作戦を実施する前提となる戦略や、政策の達成目標及び作戦地域での非軍事的領域に対する理解、②それらを考慮したデザイン構想力、③ドクトリン構築、④作戦及び戦役をプランニングする能力、⑤指揮哲学としての任務指揮という 5 点を、軍人に要求した。換言すれば、軍事組織における「作戦術」の受容は、新たな時代の軍人に求められる知的態度をも明確に規定したのである。さらには、統合教育は統合に関する研究と連動している。例えば英国においては、ドクトリン・コンセプト開発センターと統合指揮幕僚大学は同じ敷地に置かれ、研究者、教官及び学生と有機的な知的サイクルを構成するように意図されている。作戦術とドクトリンの保有と進化は、統合教育の進化と連動することを示している。自衛隊もこれまでどおりの教育が、国際舞台においてリーダーシップを取れる人材養成のために十分なものなのか、本稿で論じている作戦術とドクトリンの相関関係における国際的趨勢を把握した上で進んでいくことが必要不可欠である。

---

[46] UK Ministry of Defence, *Joint Doctrine Publication 0-01: UK Defence Doctrine*, 2014, p. 28; Mission Command については、田中靖浩『米軍式　人を動かすマネジメント―「先の見えない戦い」を勝ち抜く D-OODA 経営』日本経済新聞出版、2016 年が分かりやすい。

（3）装備体系・防衛力整備のツール

作戦術とドクトリンの相関関係は、装備体系に反映させるのが世界標準である。本項では、現在進行形かつ古典的な代表例を論じてみたい。第 2 節で分析した、米国陸軍 1976 年版 *FM100-5* は、第四次中東戦争の分析を踏まえ、陸戦での致死力拡大に対応する技術革新を意識して作られた。これがトリガーとなり、1970 年代から 1980 年代は、米国陸軍史でも例をみないほどの装備近代化の時代となった[47]。ベトナム戦争後の、大幅な人員削減の影響を食い止めるためにも、技術革新と装備の開発実用化を米国陸軍は急いだのである。

「エアランド・バトル」ドクトリンに基づく装備体系は、当初は「ビッグ・エイト」（Big Eight）とされた。①攻撃ヘリコプター、②輸送ヘリコプター、③歩兵携帯対戦車兵器、④通常弾頭、⑤デジタル通信システム、⑥新重戦車、⑦新地対空ミサイル、⑧統合指揮統制・情報収集システムである[48]。それらは諸検討を経て、「ビッグ・ファイブ」（Big Five）と呼ばれる、①M1 エイブラムス戦車、②M2 及び M3 ブラッドレー戦闘装甲車、③ヘリコプター（ブラックホーク輸送ヘリコプター、アパッチ攻撃ヘリコプター）、④パトリオット対空ミサイル、⑤多連装ロケットシステム（MLRS）となり 1980 年代に開発、生産されることになる。

これらの新装備の是非に関する論争は、1991 年の第一次湾岸戦争まで続いた[49]。「エアランド・バトル」ドクトリンによる徹底的に訓練された高練度の部隊が、「ビッグ・ファイブ」を中心とする最新装備を全能発揮したことで論争に終止符が打たれた。「ビッグ・ファイブ」は、戦場で米国陸軍の期待以上のパフォーマンスを残した。戦場での評価は、それらの生産を加速させることとなった[50]。そして「ビッグ・ファイブ」は、訓練・ドクトリンコマンドにおける装備研究開発から 30 年以上を経る 2010 年代の今日も、更新され運用され続けている。日本も財政的に防衛費を効率的に運用する宿命にあり、作戦術とドクトリンに基づく、長期的な装備体系、それも主体的かつ統合的な装備体系の構築が望まれる。

---

[47] TRADOC, *Prepare the Army for War: Historical Overview of the Army Training and Doctrine Command 1973-1998*, Military History Office TRADOC, 1998, p. 40.
[48] Ibid., pp. 40-41.
[49] Robert M. Citino, *Blitzkrieg to Desert Storm: The Evolution of Operational Warfare*, University Press of Kansas, 2004, p. 267.
[50] Benjamin King, *Victory Starts Here: A Short 40-Year History of the US Army Training and Doctrine Command*, Combat Studies Institute Press, 2013, p. 26.

おわりに

本稿では、作戦術とドクトリンの関係を、アートとサイエンス、理論、コンセプト、ドクトリン、ビジョンを含む諸概念から整理した。その上で、作戦術とドクトリンの歴史的経緯と発展過程を明らかにした。作戦術は、国際的には研究と実践を要する安全保障研究の一つであり、戦略と戦術を橋渡しする概念として欧米の学界、軍事組織に根付いている。日本においても、近年その動きがみられるようになっている。

作戦術は、黙示的に 19 世紀のナポレオンの時代から大部隊運用のノウハウとして発展してきたが、これを理論的にまとめたのは 1920 年代のソ連軍であった。ソ連においては、国家による戦争計画から、現場の部隊運用に至るまで戦略から戦術までの階層化が理解されていた。これを、軍事のみならず、一般の学界を含め発展させたのがベトナム戦争後、自信を喪失した米国であった。

1970 年代、東西冷戦が激化する中、自信を失った米軍の再建は急務であった。クラウゼヴィッツ等の古典に解を求めた米軍は、大規模部隊運用の機動戦のドクトリン「エアランド・バトル」を構築した。構築過程において、その理論的ベースになったのが作戦術であった。1980 年代のドクトリンに基づく人材養成、訓練と装備の研究開発は、相乗的効果を生み、1991 年の第一次湾岸戦争で一定の成果を見ることになる。その後、作戦術とドクトリンは組織改革の原動力となり、ドクトリンは組織の中心としてアフガニスタンやイラクにおける戦闘を通じ、21 世紀の現在も進化を続けている[51]。

特に人材養成の観点で、作戦術とドクトリンは貢献してきている。作戦術は、戦略や政策の達成目標及び戦役や大きな作戦を実施する地域での非軍事的領域に対する理解と、それらを考慮した上で実際の軍事行動を求めている。この軍事行動を律し実現するためのデザイン構築能力、ドクトリン構築能力と作戦及び戦役のプランニング能力及び自由な思考に基づく任務指揮の 4 点が軍事組織に必要な知的態度として認識されるようになった。これらを踏まえた教育機関が英米軍に設置された。まさに人材養成・供給、組織運営、任務遂行の一連のサイクルである。

---

[51] 例えば、Aaron J. Kaufman, *Learning From Our Military History: The United States Army, Operational Iraqi Freedom, and the Potential for Operational Art and Thinking*, The Army University Press, 2013 を参照。

さらに作戦術とドクトリンは、軍事組織のリーダーシップや指揮幕僚活動とも密接に関連している。NATO の共通ドクトリン文書である AJP-5「作戦レベルにおける計画のための同盟統合ドクトリン」として標準化され、特に統合軍を指揮し、作戦次元での計画立案を行う加盟国の指揮官や幕僚が対象とされている[52]。つまり作戦術とドクトリンは、国際舞台においてリーダーシップを執る上で、軍事組織にとり必要不可欠な素養となったのである。作戦術は、派生する可能性のある、まさに「可能性の術」とされる[53]。なぜならば、作戦術は軍事組織のドクトリン再生産のためのエンジンであり、教育研究、現場からのインプットとフィードバックを通じ、ドクトリンを再生産させ続ける概念だからである。作戦術とドクトリンは、密接不可分である。

加えて作戦術は、今まで戦略と戦術でしか語られてこなかった日本の安全保障研究や各種社会における分析手法及び国際的な安全保障研究の共通言語として活用できる。21 世紀に入って戦われたイラクやアフガニスタン戦争も英米政府はあまりに戦域の軍人の「作戦術」に依存し、政府としての「戦略」は不在であったとされる[54]。このように国際政治も政略、戦略のみでは事象の全貌は分析できず、作戦術からの方位線を入れることで意思決定の全貌が総合的に分析できる。また、単に戦術レベル、術科レベルを考えるだけでは、部隊が国家の戦略目標にどのように寄与するのか不明確となる。これらのレベルに対し作戦術は、双方向で息吹を吹き込む役割がある。作戦術自身、そしてそれを活用し今後研究されるテーマは一般のビジネス、軍事史を含め数多く存在している。『海幹校戦略研究』の本号の特集は、その証左である。

最後に、作戦術とドクトリンの探究を最も求めたいのは、今後の自衛隊のリーダーたちである。筆者は、2020 年 7 月から 9 月にかけて「令和 2 年度米国派遣訓練（護衛艦）」にて派遣部隊指揮官を務めた。海自の戦術技量の向上と参加海軍との相互理解の増進及び信頼関係の強化を図ることを目的に参加した、多国間共同訓練リムパック 2020、日米豪韓共同訓練パシフィック・ヴァンガード 2020 において、ハイエンドかつリアルタイムの情

---

[52] NATO, *AJP-5 Allied Joint Doctrine for Operational-level Planning*, 2013, p. ix.

[53] 片岡徹也「古典用兵思想から軍の革新へ（第 4 回）：創造の方法論を求めて」『鵬友』第 36 巻第 3 号、2010 年 9 月、43 頁。モルトケは、用兵は可能性の術とした。

[54] Hew Strachan, *The Direction of War*, Cambridge University Press, 2013, pp. 218-234.

勢判断・決断の求められる対潜戦、対水上戦、対空戦を含む各種戦訓練が行われた[55]。その日々において、指揮官として「目的、方法、手段、リスクについて、何をどう考え、行動するのか」という、これまで自身が教育研究してきた作戦術と他参加国が用いる NATO 等ドクトリンの学術で培った知力を実践する日々であった。その中で確信したことは、多国籍部隊とともに部隊運用を行いリードする指揮官と幕僚の養成について、海自の教育訓練は一層国際レベルを追求する必要があることであり、これは「精強・即応」「変化への適合」を掲げる海自の永遠の命題である。

[55] 「令和２年度米国派遣訓練（護衛艦）について（お知らせ）」海上自衛隊、2020 年 7 月、www.mod.go.jp/msdf/release/202007/20200714-2.pdf ;「令和２年度米国派遣訓練（護衛艦）の一部変更について（お知らせ）」海上自衛隊、2020 年 8 月、www.mod.go.jp/msdf/release/202008/20200803.pdf ;「日米豪韓共同訓練（パシフィック・ヴァンガード２０）について」海上自衛隊、2020 年 8 月、www.mod.go.jp/msdf/release/202009/20200912.pdf。